THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959

Vol.22 / No.4

The Baseball Hall of Fame and Museum
財団法人 野球体育博物館

平成25年　野球殿堂入り記者発表

事務局長　廣瀬　信一

１月11日㈮午後３時より野球体育博物館の殿堂ホールにおいて、平成25年の野球殿堂入り記者発表が行われました。競技者表彰・プレーヤー表彰部門では、昨年の北別府 学さん、津田 恒実さんに続き広島東洋カープの黄金期を支えた、大野 豊さんが、エキスパート表彰部門では、同じく広島東洋カープで“プロ初勝利がノーヒットノーラン”という快挙を成し遂げた外木場 義郎さん、そして特別表彰部門からは福岡・小倉中学、小倉高校でエースとして戦後間もない夏の甲子園大会で２連覇達成をはじめ、大学、社会人でも活躍され、引退後も日本野球連盟九州地区理事長などの要職を歴任されている、福嶋 一雄さんが殿堂入りされました。加藤 良三理事長の挨拶、殿堂入り通知書の授与に続き、競技者表彰顕彰者の挨拶となりました。

まずは、プレーヤー表彰部門の大野さんが「テスト生で入って、エリートでなくても気持ちを持ってやれば成功できる。自分がやってきたことが認められた」と、次にエキスパート表彰部門の外木場さんは、「信じられないし、まさかという気持ち。本当に嬉しい」と感無量の面持ちで話されました。

続いて、ゲストスピーチでは昨年同様、広島監督時代に、お二人を指導し現在は東京国際大野球部監督である古葉 竹識さんから、「こんなに嬉しいことはない。これで一緒に戦った選手が６人も殿堂入り。大変な栄誉です」。また、やはり昨年に引き続き、現在侍ジャパンの監督である山本 浩二さんは「（広島OBが２年連続２人ずつの受賞で）広島の風が吹いています。私も広島出身です。この風に乗ってWBCに向かって行きたい」と意を強くした挨拶がありました。顕彰者、ゲストスピーカー、加藤理事長を交えた集合写真の撮影、永瀬 郷太郎代表幹事より競技者表彰委員会の、また西田 善夫特別表彰委員会議長より特別表彰委員会の選考過程について各々報告の後に、特別表彰の福嶋さんが挨拶されました。「甲子園のマウンドよりも緊張しております。身にあまる栄誉で光栄です。当時のチームメートに恵まれました」と感謝の言葉が述べられました。

ゲストスピーチでは、同年代・同郷で当時好敵手であった、ロス五輪野球全日本監督の松永 怜一さん、特別表彰委員会委員の有本 義明さんから、各々懐かしい思い出話や、また「甲子園の土」を持ち帰った逸話などが披露されました。

昨年より２割も多い28社、100名にも及ぶ報道関係者にお集まりいただき、和気あいあいとした心温まる記者発表が無事に終了いたしました。

後列左から　山本 浩二氏、古葉 竹識氏、有本 義明氏、松永 怜一氏
前列左から　大野 豊氏、外木場 義郎氏、加藤 良三理事長、福嶋 一雄氏

競技者表彰委員会

第53回競技者表彰委員会は、プレーヤー表彰で軟式野球出身のテスト入団ながら通算148勝138セーブを挙げた大野 豊氏、エキスパート表彰で沢村 栄治氏と並んでプロ野球最多となる３度のノーヒットノーラン（うち１試合は完全試合）を記録した外木場 義郎氏を野球殿堂入りに選出した。

両氏はともに広島東洋カープ出身。1977年から79年まで３年間にわたって一緒にプレーしている。同時期に同じ球団でプレーした２選手が同じ年に殿堂入りするのは昨年の北別府 学、津田 恒実両氏に続いて10組目。同一球団のOBが２年連続２人殿堂入りするのは史上初めてとなる。

野球取材に関して15年以上の経験を持つ委員327名のうち323名が最大７名連記で投票したプレーヤー部門は、大野氏が有効投票数の84・5%にあたる273票を獲得。昨年の177票に96票を上乗せし、当選必要数となる同75%の243票を大きく上回った。

大野 豊氏

「この会場に来て殿堂の凄さを改めて感じました。テストで入って、まさかこんな日が迎えられるとは…。お世話になったすべての人に感謝したい」と喜びを口にした大野氏。出雲信用組合の銀行マンから転身したプロとしての「原点」は入団１年目の初登板にあった。

77年９月４日、旧広島市民球場での阪神戦。大量リードされた８回に登板し、満塁本塁打を含む５安打２四球で５失点。わずか１死しか取れなかった。泣きながら歩いて三篠の寮に帰ったルーキーは、受話器の向こうの「１試合の失敗で諦めちゃダメよ」という母・富士子さんのひと言を救いに這い上がった。

ドラフト外入団選手としては初の殿堂入り。ドラフト以外では入団できない現在のドラフト制度では「育成選手」にあたるだろうか。「軟式出身でも、テスト生でもここまで来ることができた。若い人の励みになればうれしい」。苦労人ならではの言葉である。

エキスパート部門はすでに競技者表彰で殿堂入りしている人と競技者表彰委員会幹事の計48名のうち38名が３名連記で投票した。有効投票数の75%以上となる当選必要数は29。昨年わずか１票届かなかった外木場氏がジャスト29票で殿堂入りを果たした。

外木場 義郎氏

「自分じゃ信じられないというか、まさかという気持ちでしたんで、本当に感無量です」と外木場氏。完全試合を含むノーヒットノーラン３度という快挙にも「そういう記録ができたのは誇りに思っていますが、殿堂入りはまた違う。自分はないだろうと思っていた」という。

実は今回、３名連記したのは38名中36名で、２名連記、１名が各１名。開票作業は３名連記の票から開き、残り２票の段階で得票は27。つまり２名しか投票しなかった委員、１名しか書かなかった委員が外木場氏を選んだのである。

エキスパート表彰４人目の殿堂入りとなった外木場氏が1975年の広島初優勝当時のエースなら大野氏は79、80、84年の日本一に貢献。昨年に続いてゲストスピーカーとして訪れた当時の監督、古葉 竹識氏（現・東京国際大野球部監督）は「私はこういう選手に恵まれて、監督として評価していただいて殿堂入りさせてもらいました」と頭を下げた。

古葉監督の下でプレーして殿堂入りした選手は96年の衣笠 祥雄氏、今年もゲストスピーカーを務めた08年の山本 浩二氏（現・侍ジャパン監督）に昨年、今年の４人を加えて６人。その全員がカープで現役生活を全うしている。赤ヘル軍団が強かったわけである。

写真提供：ベースボール・マガジン社

（競技者表彰委員会代表幹事　永瀬 郷太郎）

特別表彰委員会

引退したアマチュア野球選手、監督、コーチ、審判。さらにプロ、アマチュアの組織、管理に関して野球の発展に貢献した人物を対象にした特別表彰選考委員会は、今回、福嶋 一雄氏を野球殿堂入りとして選出しました。

第二次世界大戦が終った翌年、西宮球場で復活した「全国中等学校野球大会」は翌1947（昭和22）年、懐かしい甲子園球場に戻りました。その第29回大会で北九州地区代表の小倉中学が優勝しました。福嶋投手は全５試合に完投。九州の代表チームの初優勝で「大会旗初めて関門海峡を渡る」と話題になりました。

1948（昭和23）年の「学生制度改革」の実施に伴い、中等学校野球は高等学校野球に成長し、小倉高校は３年連続で甲子園に出場、小倉高校は福嶋投手の全５試合完封勝利という好投もあって連覇しました。夏の選手権大会連覇という快挙は、この後2005（平成17）年の駒大苫小牧まで達成出来なかった記録です。全国中等学校野球大会の最後の優勝も、高等学校野球大会の初優勝も福嶋 一雄さんが投げる九州・小倉中学、小倉高校が果たしました。

学制改革に伴う処置で、翌夏1949（昭和24）年も甲子園に出場した小倉高校・福嶋投手は準々決勝で岡山代表・倉敷工業に接戦の末、延長10回、７対６でサヨナラ負けし三連覇の夢は断たれました。試合終了の挨拶の後、茫然とした福嶋投手はダッグアウト前の砂を握ってユニホームのズボンのポケットに入れました。このシーンを大会副審判長の長浜 俊三氏が見ていました。ふるさと小倉に帰った福嶋投手宛てに、一通の速達が届きました。それは長浜副審判長からの手紙でした。「福嶋君、君のユニホームのポケットには砂が入っている。その砂には君が学校では学べなかった尊いもの総てが詰まっている。人生を正しく生きてほしい」と書かれていました。忘れていた福島さんはユニホームのズボンを振ってこぼれた土を、庭のゴムの木の植木鉢に移しました。これが今に伝わる「甲子園の砂」伝説の始りと言われ、ゴムの木は今もあるそうです。

テレビ放送の開始は60年前の1953（昭和28）年、まだ野球ファンはラジオ実況で甲子園を聞き、翌朝の新聞で確かめ、やがて野球雑誌で記憶、思い出にする時代でした。今はテレビ画面の印象が甲子園の総てですが、敗れたチームの投手がベンチ前で思い出の甲子園の砂を掬う姿を見逃さなかった大会役員の存在に私は選手たちへの広く大きな愛情を感じます。

福嶋さんは進学した早稲田大学では４年間で４回の優勝を経験しましたが、当時の早稲田には上に小倉中学の先輩・末吉 俊信、後輩には石井 連蔵と好投手が揃い、投手としては地味な存在でした。

しかし、スマートなユニホーム姿は人気の歌舞伎俳優・市川 海老蔵（現･海老蔵の祖父）になぞらえて「神宮の海老さま」と若い女性ファンの憧れの的でした。

福嶋 一雄氏

1954（昭和29）年、早稲田大学を卒業した福嶋さんは故郷の八幡製鉄（現・新日鐵住金）に入社しました。夏の都市対抗野球大会では社会人新人投手として先発に、リリーフにと登板し、並み居る強豪を倒して八幡製鉄に17年ぶりに黒獅子旗を持ち帰りました。

現役を引いた後は監督を経験、さらに日本野球連盟の理事、今も九州地区の理事長として球界の発展に尽くされています。

私たちの喜びは、お元気な福嶋 一雄さんに殿堂入りの証を直接お渡しできたことです。これは６年前、松永 怜一さん以来の事です。

（特別表彰委員会議長　西田 善夫）

「公益財団法人」認定取得に向けて　～その②～

事務局長　廣瀬　信一

前号では、「公益財団法人」の概要、当館の認定取得に向けての経緯などをご報告させていただきました。今号では、制度改革の中心的な部分を占める、「定款」と「組織体制」についてご説明させていただきます。

新制度では、従来の財団法人の事業運営を規定していた、「寄附行為」に替わる新たな「定款」の作成・制定が必要となりました。代表的な変更点をいくつか紹介いたします。まず、名称ですが、本年４月１日より「財団法人野球体育博物館」から「公益財団法人野球殿堂博物館」に変更いたします。併せて、事業目的にあります「野球体育に関する資料を収集し～」の「体育」を外して「野球等」と「野球」に特化することにいたしました。昭和34（1959）年博物館設立当時は、まだまだ「野球」に対する社会の評価は低く、文部省（現在の文部科学省）から「財団法人」の認可を得るうえで、「野球」だけではなく、スポーツ全般に関するものも扱うことが要求されました。しかし、今や「野球」は国民的スポーツと位置づけられるまで隆盛し、当館においても、現状収集品はほぼ全て「野球」に関するものとなりました。

また、「野球殿堂」に対する認知度・注目度も年々高まりを見せ、「野球殿堂入り」記者発表には多くのマスコミが集まり、新聞、テレビ等で大きく取り上げられるようになりました。「野球殿堂」は当館の基幹事業でもあり、殿堂並びに当博物館のさらなる認知度のアップを図るため、名称を「野球殿堂博物館」に変更することにいたしました。

次に、「組織体制」についてご説明いたします。旧制度では、理事会、評議員会において代理出席による議決権の行使が認められていましたが、新制度では原則、本人出席による決議が必須要件となり、また、理事と評議員の兼務が廃止となりました。それにともない公益財団移行を円滑に行うため、そして事務の効率化と会議の機動性を高めるために、昨年10月の役員改選時にあわせ、理事・評議員の構成人数の見直しを行い削減いたしました。具体的には、理事については10名以上15名以内を６名以上10名以内に、評議員については26名以上31名以内を16名以上20名以内にそれぞれ削減いたしました。さらに、評議員については野球界だけでなく、幅広く、学識経験者の立場から元東京大学学長で現在学習院大学教授の佐々木 毅氏に、また、女子野球界でご活躍中の国際野球連盟女子野球委員の山田 博子氏にご就任いただきました。

最後に、当館の組織体制の変更についてご説明いたします。「寄附行為」上では、事務を処理するための事務局長以下の職員と、博物館を運営する館長以下の学芸員などが併存する組織体制でしたが、現状では全職員が一体となって博物館全体の運営業務を行っており、区別する意味合いはほとんどなく、かえって複雑な組織体制となっていました。認定を内閣府に申請する際も、担当官から分かり易い組織体制にするよう指導があったため、事務局制を廃止し館長以下の体制に一本化することといたしました。

今後も、各部門並びに殿堂事業のさらなる強化・充実を図っていきたいと思います。

殿堂入りの人々を語る (38)

祖父の思い出

竹内　宣之（君島 一郎氏 孫）

2009年野球殿堂入り
君島 一郎氏レリーフ

祖父は、野球殿堂入りの栄誉を得ましたが、プレイヤーとしてではありません。殿堂入り発表翌日のヘラルド・トリビューン紙が報じているように、ベースボール・ヒストリアン（Baseball historian）としてだと思われます。その受賞の源泉は、著書の『日本野球創世記』でした。

祖父・君島 一郎は、明治20（1887）年、栃木県塩原温泉の明賀屋旅館・君島 五郎の長男に生まれました。旅館は、江戸時代から続いた湯治場です。父・五郎は、江戸から明治への変革期に当たって、これからは、西洋人の宿泊客が増えると考えました。そこで、祖父は小学生時代から、山里の温泉場を離れます。そして小学５年生（10才）から栃木県下の川西町（現・大田原市）でボール（野球）を始めました。その後、宇都宮中学（現・県立宇都宮高校）、第一高等学校（現・東京大学教養学部）で野球部に所属し、当時一世を風靡していた、一高・三高（後に京都大学教養部）戦で二塁手として活躍。その後、東京大学で経済・財政学を学び、日本銀行に奉職しました。日本銀行では、ロンドンに派遣され、ヨーロッパ各地の銀行業務を２年余に亘り視察しました。

君島 一郎著『日本野球創世記』
（1972年 ベースボール・マガジン社発行）

また、日銀支店長として、函館や門司で、ゴルフ倶楽部創設にも力を入れました。そして、朝鮮銀行副総裁として、外貨円の発券に尽力。戦後は、公職追放となり、その間に調査したのが、野球の歴史（創始・一高時代）です。

祖父は、多感な青年時代に日露戦争勝利に強く鼓舞され、家業の旅館業ではなく、国家に奉仕する事に決めた、と語っています。さらに祖父の生涯に大きな影響を与えた人に、君島 武男氏がいました。彼は、叔父、と言っても明治19（1886）年生まれ、年は祖父より１才上の、ライバルです。君島 武男氏は祖母の後夫の連れ子として、旅館に入りました。幼くして神童と呼ばれた人で、宇都宮中学では野球部に所属し、第一高等学校、東京大学化学科を卒業後、九州大学教授に奉職し、ブリヂストン・タイヤ会社に技術面で協力。当時至難とされたタイヤ工業を日本人の手で育て上げました。「私が今日あるのは、その彼に負けまいとする気持ちだった」と後年、祖父は述懐しています。

このように、戦前・戦後の大家族の中で切磋琢磨する、“競争”こそが、これからも、学生野球・プロ野球また、ひいては、日本の政治・経済発展の原動力になるように思われます。

さて、祖父と野球ですが、日銀入行の頃、当時は、中学・高校野球の選手などは評判が悪く、ろくな者はいないと見られていた為に、入行後もこのことをひた隠しにしていたそうです。今とは、隔世の感があります。

また、私が小学生の時、キャッチボールは、スナップの効いた良い球を投げ、相撲を取っても、足腰が強かった頑健な祖父の姿を想い出します。

晩年は、高校野球・プロ野球の大ファンで、大学同窓の読売・正力 松太郎氏と親しく、ジャイアンツの試合をTVで見て、よく論評していました。

なお、野球発祥の地、東京神田・学士会館に、祖父の言う通りに、記念碑が建立され、先年、除幕式に招かれました。その時に、祖父の写真を携え、彫像を見せることができたのが、ささやかな孝行だったと考えています。記念碑には、“野球が日米の懸け橋に”、との思いが込められていました。

今後共、日米関係は、ブッシュ大統領・小泉首相のように、お互いにキャッチボールができる間柄であって欲しいと思う、今日この頃です。

知ってほしいこんな資料（80）

「1934年日米野球・大リーグ選抜チームユニホーム」

当博物館では、フランク・オドール氏（2002年野球殿堂入り）着用の「1934年日米野球・大リーグ選抜チームユニホーム」を横関 道子氏よりご寄贈いただきました。

読売ジャイアンツの創立記念日にあたる12月26日、元巨人軍常務取締役・佐伯 文雄氏の姪にあたる横関氏とご親族が来館され、巨人軍山岸 均取締役のご同席のもと、オドール氏ユニホームの寄贈セレモニーを開催しました。

このユニホームはオドール氏から友人の佐伯氏に贈られたものです。佐伯氏はハワイ出身、読売新聞運動部長を経て、1967年に巨人軍１軍担当総務に就任、71年常務取締役。Ｖ９時代から80年代初期のフロントの大黒柱として海外との交渉でも活躍され、オドール氏との交流からこのユニホームを贈られたとのことです。

当館では2005、06年に２度、横関氏より借用して展示したことがあります。そして、2012年が佐伯氏の没後30年の節目ということで横関氏からのお申し出があり、今回ご寄贈いただくこととなりました。

このユニホームはスポルディング製、襟元には同社のタグと「F. L. O'Doul」の刺繍が入れられています。当時の写真をよく見ると、シャツの襟のデザインが２種類あるようで、このユニホームのようにスタンドカラーのタイプと、カラーの付いていないタイプがあります。それぞれの在籍チームのユニホームの襟のデザインにあわせている（ヤンキースのルース、ゲーリッグ、ゴーメッツは襟なし）ようですが、例外の選手もおり（アスレチックスの選手は襟の有無が混在）、選手の好みも反映されたのでしょうか。

左胸には丸型ワッペンが付けられており、光沢のある刺繍で米国旗を図案化したマークに“ALL AMERICANS”と入れられています。左袖には帽子マークと同じく“U”と“S”を重ねたマークの刺繍が、右袖には米国旗を図案化した刺繍がワッペンとして付けられています。襟や前立て、袖のラインも国旗の色である赤、白、青の光沢のあるラインを使用しており、ビジター用のグレー地ながら大変華やかなユニホームです。

横関家の皆様と山岸取締役、廣瀬館長

79年前のユニホームとは思えないほど状態がよく、大切に保管されていたものと思われます。このユニホームは１月末まで野球殿堂ホールで展示した後、常設展示の日米野球コーナーに移し、この日米野球の対戦相手となった全日本チームの久慈 次郎主将のユニホームと並べて、３月末まで展示の予定です。ぜひご覧ください。

学芸員　関口　貴広

野球体育博物館 トピックス（2012年10月～2012年12月編）

【10月27日】リトルリーグ世界一！　東京北砂チーム来館！

日本シリーズ第１戦で、巨人ナインと一緒に守備に就いて始球式を務めた、リトルリーグ世界選手権優勝の東京北砂リトルリーグ（東京・江東区）の選手が試合開始前に来館しました。

優勝記念サインボール展示の前で記念撮影

【11月22日】ジャイアンツ新入団選手が来館！

原監督の新人時代のユニホームと記念撮影

読売ジャイアンツの新入団選手７名が来館しました。菅野 智之投手ら７名の選手たちは、戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」を訪れた後、野球殿堂をはじめ館内の展示を見学しました。

【11月20日】カル・リプケン12歳以下世界少年野球大会優勝トロフィーが寄贈されました！

日本少年野球連盟藤田会長、関副会長、関谷団長他が来館され、2011、12年大会優勝トロフィー等の寄贈セレモニーを開催しました。トロフィーは現在、常設展示少年野球コーナーにて展示しています。

寄贈セレモニー後の記念撮影

【12月23日】高井 保弘氏（元阪急）が来館！

高井氏と記念プレート

高井 保弘氏が来館され、ご自身の通算20本目の代打本塁打記録賞の記念プレートなどをご覧になりました。１月８日にはNPB記録である代打27号本塁打達成バットをご提供いただき、同日より公開しています。

こんにちは図書室です

作家と野球

1934年第８回都市対抗野球に「鎌倉老童軍」というチームが出場しました。このチームは久米 正雄、里見 弾、大佛 次郎ら鎌倉文士の野球好きが高じて、選手を集めたチームです。総監督・久米 正雄で里見 弾、大佛 次郎はチームの後援にまわりました。監督・稲垣 重穂、選手は早稲田の雨宮 義信（旧姓・水上）投手など、かつて東京六大学で活躍した選手を集めたチームでした。「鎌倉老童軍」は「川崎コロムビア」（1933年～1940年の８年間で７回都市対抗に出場）を破り、東海地区代表（当時）として本大会に出場し、異色のチームとして注目されました。予想でも“投手の調子が良ければ、あるいは大物を食うかも”とありましたが、初戦の全台北戦で守備が乱れ10対１で敗れてしまいました。

図書室には総監督であった久米 正雄の『微苦笑随筆』という本があります。

『微苦笑随筆』は、1953年に文藝春秋新社から発行された29の随筆と「返り花」という俳句集からなる１冊です。この中に、「文士野球団の思ひ出」という随筆があります。大正の終わりころに里見 弾、大佛 次郎などとチームを作り、漫画家や歌舞伎役者のチームと試合をした話、メンバーや応援の話などが主な内容です。ただ、このチームと「鎌倉老童軍」のつながりについては“語る余地がなくなった”とあり、詳しい事はわからないのですが、“飛田 穂洲（1960年殿堂入り）が試合を見に来て記事を書いた”、“サトウ・ハチローは捕手として活躍した”、“大佛 次郎がスライダー投手だった”など、さまざまなエピソードや作家たちの意外な一面が面白い読み物です。

作家や文学から見る野球も、野球の専門書にはない面白さがあります。

司書　小川　晶子

博物館からのお知らせ

▶職　員

学芸員の新 美和子が12月31日付で定年退職いたしました。なお、１月からは嘱託として週１日勤務しております。

▶販売中

《NPB統一球オーセンティックボール》

（シリアルナンバー入りNPB承認シール付き）　2,500円（税込）

※郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金（公認球代+梱包送料）を現金書留で当博物館までご送付ください。

公 認 球：１個 2,500円

梱包送料：１個　　250円
　　２～３個 400円
　　４個以上 送料無料

送付先：
〒112-0004 東京都文京区後楽1－3－61
財団法人野球体育博物館 公認球係

●編集後記
紙面の都合により、「コラム　博覧／博楽」はお休みしますので、ご了承ください。
次号のニュースレターは、正式に公益財団法人へ移行のお知らせのため、発行が少し早くなります。

● 博物館のご案内

場　　所　東京ドーム21ゲート右

開館時間　３月１日～９月30日　AM10時～PM６時
　　10月１日～２月末日　AM10時～PM５時
　　（入館は閉館の30分前まで）

入 館 料　大　　人　500円（300円）
　　小・中学生　200円（150円）
　　65 歳 以 上　300円
　　（　　）は20名以上の団体

休 館 日　月曜日
　　（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
　　年末・年始（12月29日～１月１日）

《２月・３月・４月の休館日》

２月　４日・18日・25日
３月　４日・18日
４月　８日・15日・22日

※３月から閉館時間が午後６時（入館は午後５時30分まで）となります。

Newsletter　Vol.22 / No.4
2013年１月25日発行
編集・発行　　財団法人　野球体育博物館
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel　03（3811）3600　Fax　03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959
Vol.22 / No.4
The Baseball Hall of Fame and Museum
財団法人 野球体育博物館

リレー随筆(51)

野球規則

競技者表彰委員会幹事　　藤原　雅仁（共同通信社）

中日の大島が打席へ。巨人のマウンドにはホールトンで、一塁を守るのは亀井。それで一塁塁審は橘高審判員と役者がそろえば、場面は2012年セ・リーグのクライマックスシリーズ・ファイナルステージ第２戦、東京ドームだ。

ご覧になっていない方のために、リプレーしておこう。一回、先頭打者の大島の打球は、ワンバウンドでホールトンの右を襲う。ホールトンは素早く反応し、打球を捕らえた。か、に見えたが、打球はグラブの指と指の間に挟って送球できない。仕方なくグラブごと亀井にトスする。亀井は胸で抱え込むようにキャッチした。タイミングはアウトだ。しかし、橘高審判員のジャッジは「セーフ！」。内野安打である。

「エッ、アウトじゃないの？」と思ったのは一瞬だけ。そこはそれ、こちらも野球デスクの端くれ。すぐに「これは完全捕球ではないからだ」と理解した。野球規則の二・一五CATCH「キャッチ」（捕球）から抜粋すると、捕球とは野手が打球、送球を手またはグラブでしっかり受け止め、それを確実につかむ行為とある。つまり、ボールの挟まったグラブを抱きかかえても捕球ではない。

さて、前置きが長くなったが、本題はここから。この「野球規則」について言いたいことがある。何せ使いづらい。どこに何が書いてあるのやら。橘高審判員のジャッジについては、比較的すんなり二・一五にたどりついたものの、いつもこうとは限らない。おまけに文章が小難しい。まるで法律書を読んでいるような、どんよりした気分になってしまう。せめて索引だけでも工夫してほしい。日ごろ野球規則に慣れ親しんでないからだと非難されればそれまでだが、案外この意見、関係者にもうなずいていただけるのではないか。

例えば失策のページ。失策を記録する規定として（a）から（c）まであって計10項目が記されている。逆に失策を記録しない場合は（d）から（f）までで計８項目ある。しかも「打者の打撃の時間を延ばしたり」とか「頭脳的誤りが実際のミスプレイにつながった場合」など、相変わらず表現がややこしい。さらに、必要に応じて【原注】や【付記】が散りばめられているから目が回る。野球規則を読みこなせる力があれば、新聞記者などになっておらず弁護士にでもなって、今ごろは選挙に打って出て第三極などと持てはやされていたりして…。

そんな野球規則の中で、気に入っている項目がある。七・〇七「スクイズプレイの妨害」がそう。簡単に言えば、捕手がスクイズを企てている打者の邪魔をしたら、投手に「ボークを課す」というものだ。本来なら捕手の打撃妨害で打者に一塁が与えられるだけであり、三塁走者は三塁に帰らないといけない。しかし、いくら失点を防ぐためとはいえ、捕手のこの行為はひどい。そこで投手に「ボークを課す」ことによって、三塁走者の生還を認めるのである。何も悪いことをしていない投手には気の毒だが、悪質なプレーは許さないという精神がいい。この野球規則の臨機応変とも言える裁量がいい。

でも、同点の九回裏、１点取られたらサヨナラ負けの場面でスクイズを見破れば、捕手は打者に体当たりしてでも阻止したいに違いない。打撃妨害は取られても仕切り直しできるから、気持ちは分からないでもない。大昔はルールの網をかいくぐって、そういうプレーもあったのではないか。それを防ぐため「ボークを課す」の項目が付け加えられたのだろう。

インフィールドフライにしても、フォースプレーのルールを逆手に取った併殺狙いの頭脳プレーがあったからこそ、追加されたルールではないか。野球規則は今でも毎年、頭脳派の先手を打つわけでもないだろうが、部分的に改正されている。2012年版では７項目で追加なり、削除なりの手が加えられている。

大昔の規則集はきっと薄っぺらだったと思う。そこにID野球の提唱者のような頭脳派がつけ込み、いろんな〝裏技〟を編み出した。その度にルールが追加され、野球規則もだんだんと分厚くなっていった。この想像はそんなに外れていないだろう。そう言えばID野球の元祖、この人も野球の世界に進んでいなければ今ごろ、らつ腕弁護士だったりして…。